

PHD LETTER

<19>

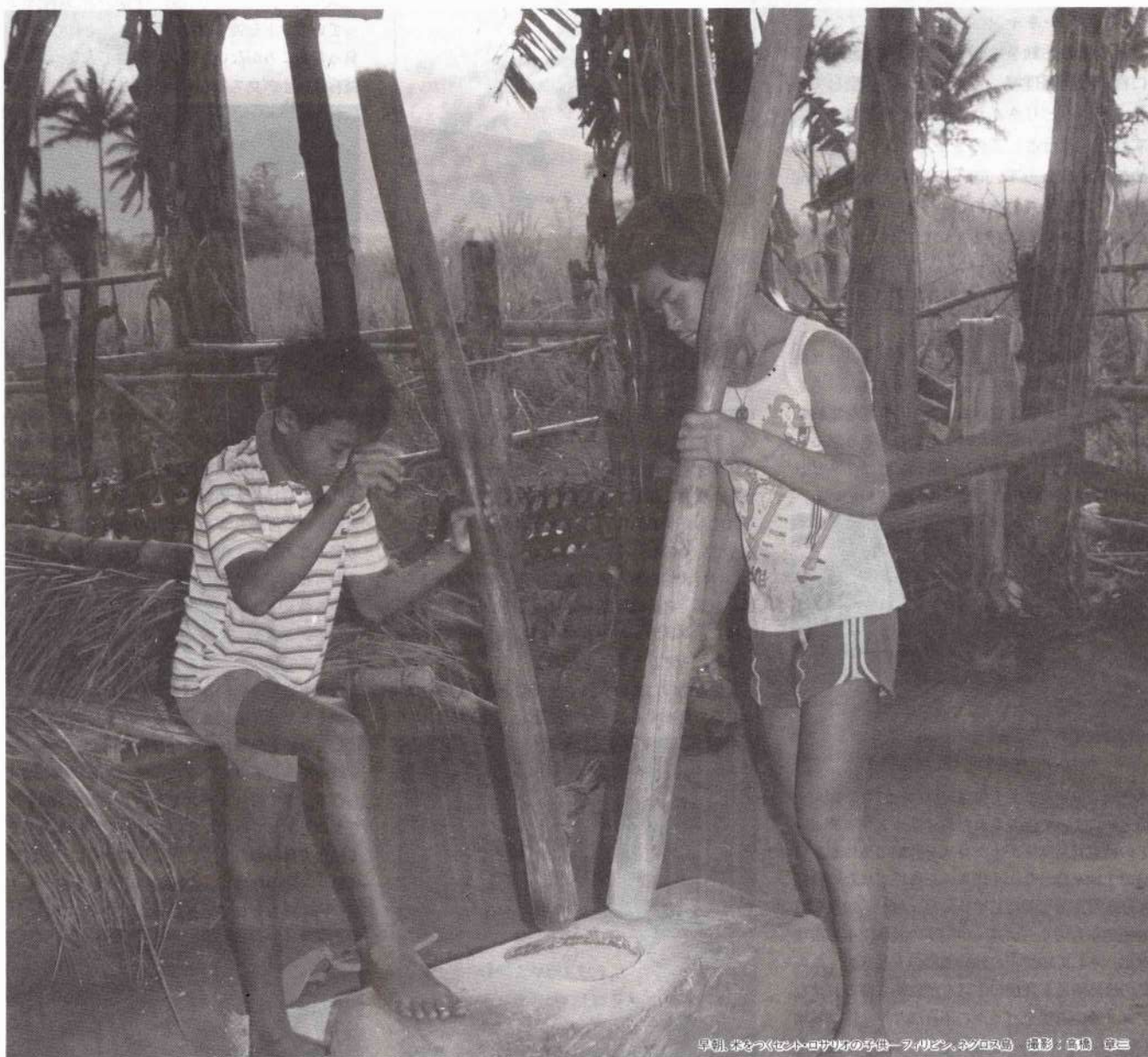
1986.6

PEACE·HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会
編集人：草地賢一
住所：〒650 神戸市中央区元町通5-2-3
甲南サンシティ元町ビル711 TEL(078)351-4892
郵便振替：神戸1-29688財団法人ピー・エイチ・ディー協会
定価：100円
レイアウト：エフアンドエフ

- フィリピン特集……砂糖の島、ネグロスで学んだこと……P.2
スタディツアー報告……P.3



早朝、木をつなぐセロカパの村の子供—フィリピン、ネグロス島 撮影：高橋 卓三

*Bilang mga mamamayang may pagmamahal
sa kalaysan at buhay, may pananagitan tayo sa
kapwa natin.
Magkanya tayo tungo sa ganap na pagpapalaya
ng daigdig at ang mga anak nito!*

Deesa M. Quesada

かけがえのない自由と生命
自由と生命を奪われている人と分かち合おう
手をつなぎ、真の自由を求めて
世界と世界の子供たちのために

デッサ・ケサダ(DESSA QUESADA)
21才 フィリピン大学経済学部卒
PETA (フィリピン教育演劇協会)と
CAP (愛護するフィリピン芸術家グループ)のメンバー。
歌を通じて、フィリピン民衆との連帯を訴えている。
5月上旬、来阪。

砂糖の島ネグロス島で学んだこと

写真・文 松中みどり

今年、2月のフィリピンの政変をきっかけに、一般の人々の目もフィリピンにむけられた。マルコス前大統領、イメルダ夫人のスクランダルめいた話題から日本からの援助のあり方、そして今、ネグロス島の人々の窮状が報道され、ネグロス・キャンペーンも行われている。PHDでの活動をはじめとして、大阪を中心に様々な国際理解、協力のために活動している、松中みどりさんがこのほどネグロスを訪ずれた。流行としてのフィリピンにしないための願いをもって、以下のレポートをお届けする。「アフリカの次のフィリピンではない。」ことを皆さんに認識していただけたらと思う。(編集部)



フィリピン中部ビサヤ諸島に位置するネグロス島、この島の現状がフィリピンがもたらえて来た、そしてこれからもかかえ続けるであろう問題を集約している——四月中旬ネグロスを訪れてそう思った。ネグロス島は、いわゆる“砂糖の島”フィリピン全土の約1割の砂糖きび栽培面積を占めている。



小屋の屋根を編む農民—ネグロス

米比通商協定及びL.L協定(ラウレル・ラングレー協定)によって保証されたアメリカとフィリピンの特恵貿易関係がネグロス島を砂糖の島にし、自分の土地を持たない小作人達を農民ではなく砂糖きび生産業従事者にしていった。だが、1974年L.L協定うち切り、ソ連・中国等の競争相手の市場進出、そして1982年の砂糖価格の大暴落が、この島の経済構造と住民の生活を根底からゆがかせた。アメリカの市場をバックに不自然な単一作物栽培(モノ・カルチャー)を続けてきたネグロス島は今、砂糖きびを作れば作るほど赤字になるどころまで追いこまれ、地主達は土地を休ませても何とかこの時期を乗り切ろうとしている。一方、大農園に雇われ、砂糖きびしか作ったことのない小作人達は貧乏を切り、別の仕事のあてもないまま飢えと貧困の中で、一日一日をやっと生きていくのだ。アセンダ(砂糖きび農園)を訪れ、そこに生きる人々の毎日を取材し、どういう方法で彼らを「援助」できるかをさぐる——これが今回の旅の主要な目的であった。ネグロスの悲惨な状況は知られるようになり、キャンペーンが各地ではられ、緊急援助物資が送られているが、それ昨年までの

アフリカ・ブームのように「可哀想な飢えた人々に食物を毛布を」といった運動になってしまわないように、私達はしっかりと目をあける必要がある。ネグロスは緑の島であった。肥沃な土地の広がる、農業に適した環境の、美しい島であった。それにもかかわらず、なぜ人々は飢え、子どもは死んでいくのか。そこに、モノ・カルチャーを押しつけた大国の影を見、現在の南北問題の構造を読みとり、自分の生活をふり返るという意識なしには、ネグロス・キャンペーンも又、一時のブームに終わってしまうことだろう。「緊急援助のための食料や医薬品を送ったり、お金を集めたりすることは可能だし、現在の日本で



栄養失調の子供—ネグロスの病院

はむしろたやすい。しかし、もっと息の長い、お互いの顔が見えるような協力のしかたはないものなのか。お互いに助け合い、より良い関係を築けるような方法はないのだろうか。アセンダでも、パコロド(ネグロス西州都)のスラムでも、マニラでももう問い続けた。この問いに、言葉ではなく行動で、ふれ合いの中で答えてくれた若者達がいる。アセンダを訪れるにあたって世話役をひき

——松中みどり 23才。会社員。学生時代から、国際協力にかかわる多くの市民運動に参加。昨年8月、PHDスタディーツアーに韓国へ。この4月、彼女らとって2回目のフィリピン(ネグロス島—セブ島—マニラ)を訪ねた。

受けてくれたN.F.S.W(全国砂糖労働者同盟)で出会ったワーカーである。アセンダにしばらくつけられ、法的な保護もままならない労働条件に甘んじている砂糖労働者にねり強くオルグをおこなっていた。自国の歴史をよく勉強して政治意識が高く、フィリピンの将来が若者の肩にかかっていることを強く自覚していて、それについて気負ったところがない。陽気なタフな人なっつい。彼らは、ネグロスのこと、フィリピンのことをも



ストライキ中の銀行の玄関で、マニラ

つと皆に知ってもらいたいと言った。同時に日本のこと、日本の労働者のこと、様々な組織的活動等についてももっと知りたいとも言った。物資援助と同じくらいに大切なのが、そういった情報のきめ細かいやりとりであり相互理解を深めるための努力であることを、彼らは教えてくれた。朝早くから夜遅くまで熱心に勉強したり活動したりしている彼らを思い出すと、日本人がフィリピンを、そしてアジア第三世界を、“援助”すべき遅れた地域としてではなく、学ぶことの多い、共に手をとり合ってより人間的な世界を作るために助け合う仲間として意識出来るような活動を展開しなければならぬと思う。いつか彼らと再会した時に胸をはって報告できるように。フィリピンから伝えられる、多くのニュースを単にフィリピン内でのできごととしてみすこすするのはなく、日本のそして私たち自身のあり方に照らしていくことが大切になる。そのために、今回の旅の体験を生かして精一杯の努力をしたい。



スラムの親子—セブ島

政変によって一時は実施が危ぶまれたスタディーツアーだったが、兄弟、親子を含む小中学生、大学生、教師、主婦、酒屋さんの一行13名は3月23日—30日の間、フィリピン、ルソン島中部の農村地域を訪れた。既に帰国しているも名の元研修生の住む地域(ラブナ・パイ)を中心に4つのグループに分かれ家庭滞在をした。農閑期しかもホリウィークと重なり、彼らの活動を充分に見ることは出来なかったが、皆、元気で行き迎え



ホリウィークの村の教会

キリスト教の復活祭を祝う週間に行き会った私達。キリスト受難の金曜日には、どこの教会も美しく飾りつけをし、終日、鎮魂歌を朗読していました。村でも街でも、マリア像や十字架を掲げた行列が続き、キリスト教がフィリピンに深く根づいていることを知りました。



ジブニーは安くして便利の庶民の足。集合タクシーという感じです。満員のジブニーで、小さな女の子が巨漢・若井さんにスッと席を譲りました。若い母親いわく、「子供は料金を払っていないんだから、大人に席を譲るのはあたりまえです。」



ヤシの実

固い殻の内側に、無色透明のジュースがたっぷり。甘すぎず酸っぱすぎないこのジュース。ポカリスエットに似ていると宮下さんは主張しています。ジュースのあとは、実を半分は割って、ゼリー状の果肉をいただきます。

どのステイ先でも、私たち日本人は大歓迎を受けました。でも、年輩の方が「日本の歌を歌おう」と言って軍歌をニコニコ歌い出した時には、どんな顔をしてよいかかわらなかつた。(宮下明子)

パイラ中は地域総合保健開発に携わるC.C.H.P.の皆さんに大変お世話になり、車の手配・連絡・交歓行事の準備、夕食会など最終朝かい配慮をいただきました。感謝!

スタディーツアー 報告 もうひとつのフィリピン



丸山さんが持ってきた200人分の材料を使って、ぜんざいパーティーを開きました。ねばりと伸びるもちや塩昆布とフィリピン人の熱心な(?)出合い。特に、割りばしの使い方は、皆さん四苦八苦していました。



バスケットボール交歓試合

フィリピンはともかくバスケットボールがさかんで、どこにでもゴールがありバスケットコートがある。私達はいつも寄せてもらって、日本人対フィリピン人で試合をしたが、すごい差で負けてしまう。でも、私たちがシュートを入れると必ず「はくしゅ」で受け取られたのでとてもうれしかったです。(藤安由佳)

フィリピンでの土作りに思う

——但馬農業高校教諭 曾我 一作

雪の大阪空港から一気に暑気に満ちたマニラへ到着。当初はややとまどったものの、明るく開放的な雰囲気や気味よく村落や家庭に入らせてもらい、本当に楽しい充実した一週間を過ごす事ができた。私は単にカラバオ(水牛)に乗れたらというぐらいの軽い気持ちで参加したが、数限りない収穫物を持ち帰ることができた。PHDよりこの旅の目的の一つに、持ち帰るだけではなく、「分かち合い」を現地で実践して欲しいとの事、畑や柑橘園を見て、第2期研修生のレネさん等と深夜まで話し合ったが、適切なアドバイスになったかどうか? 農業は本来、地域に根ざしたものであり、比国の長い歴史と伝統の上に築かれた農民の知恵を重視した指導が必要であり、今の日本のような金食い技術を一時的に比国に持ち込んでも、それは適

切な指導とは言えないと思う。さて、レネさんの畑の土は乾期は固くて耕転も折れ、雨期は重くて鉄も思うようにならない。土質改善が先決で、深耕をし、有機物を多量に投与しなければならない。しかしこの当然の事が普及しない理由があるに違いない。1.高温で分解が早く有機物が無効化するのは? 2.雨期には浸食を起こすのでは? 3.面積が広く人力ではどうにもならないと考えているのでは? 4.小作地であり運動的農法を採用する気にならないのでは? 5.の問題がネックになっているのか明確ではないが、この問題に限らず社会的・経済的改善や、仲

間作りを含めた長期展望の地域作りの中でレネさん他のPHD研修生の奮闘ぶりに拍手を送りたい。Thank you! Grass-roots people.



カラバオに乗ったがっさけんの曾我先生

●ウイラット君の村

バンコクからクルマなら14時間、バスで10時間、約880km北に上った所にタイ第二の都チェンマイがあります。車で10分も走ればもう電気のない村が点々とあります。今年の研修生ウイラット君は、チェンマイから約100km北西に入ったポックオ村メニヤハディー地区から来日しました。ウイラット君は現在可愛い奥さんと一人息子、それに母さんと一緒に住んでいます。メニヤハディー村を昨年1月に訪ねた時は細い道しかありません

●漁村の復興を

ユリ君はウラカラレグというパダンの町はずれの漁村の出身です。九才の時、お父さんを亡くし、それ以来大家族の中で家計を支えるために、大人に混じって夜から朝にかけて漁に出て、学校に通ったという根性の持主です。パダンはインド洋に面した海の町です。ジャカルタから飛行機で約一時間半で、日本軍が40年前に開いたというタピン空港に着きます。日本の影は多少残されています。日本ブキティンギにも、パダンにも戦争中の日本戦闘機が台座に据えられて保存されています。戦時中、概して日本に対する感情は良好のようでした。しかし、戦後の政治指導者は、政府レベルの援助プロジェクトが幾つかあった関係で、日本の技術援助を評価し、更に期待しているようです。ユリ君の村は州都郊外にあるため、住居がどんどん建てられてきており、村の中は極貧の漁民と新興中産階級の綺麗な家とのコントラストが、何か奇妙に思える程です。

昨年8月と今年3月、二度にわたって西スマトラを訪ね、痛感しているのは漁民の貧しさです。アジアを訪ねる度に農民の貧しさを実感していましたが、彼等は何と云っても食糧をつくっている。しかし漁師は食糧を獲る立場、この作ること・獲ることの差異は誠に大きいと思います。原始的であればある程、不安定さが大きくなるからです。農村には多数の青年がいますが、ユリ君の村や、近くの漁村に青年漁師の姿が見えません。早く漁村に青年が戻るよう、彼の学びが先実したものであって欲しいと願っています。(草地)

BANYAK IKAN

ハニヤハディー村の魚



ユリ・タムリンさん

●ベリヤさんを待つ人々

北タイの首都チェンマイからバスで約3時間、高速道路を南下すると、タクという町に着きます。そこから乗合トラックで更に西に3時間走ると、ビルマ国境の町メニヤハディーに着きます。ベリヤさんは、昨年11月15日午後3時頃、メニヤハディーの町に入ってメーチャラーウ村(ベトナムの故郷)へ行くのかどうか聞きました。メニヤハディーの村も戦場になっていて、外国人が入るのは非常に危険だということでした。私は諦めてビルマカレンの人々の難民キャンプを訪ねることに致しました。ベリヤさんもウイラット君と似たタイカレン族。少

数民族として色々な困難の中で、力強く自立しようとしている女性です。彼女はお母さんの7番目、お父さんは82才、既にお母さんは亡くなっています。日本での学びを終えて帰国すると、チェンマイの生活をやめて、ウイラット君やプリチャーン君の村に入り、特にこの村の婦人や幼児の保健教育のために献身することになっています。どこの村の様子を見ても、基本的な衛生思想が理解されていません。幼児の死亡率もタイ族の村に比べて高いと聞いています。また急性に貨幣経済が浸透しつつある村の中で、育児保健・家計管理の助言を必要とする沢山の農村婦人が、ベリヤさんを待っています。(草地)

ပါပျာတီကိတ်ပီ (ပဲခူး)

ウイラット君の村

ပုစုပုပု

ウイラット君の村

元気で、ありがとうございます。



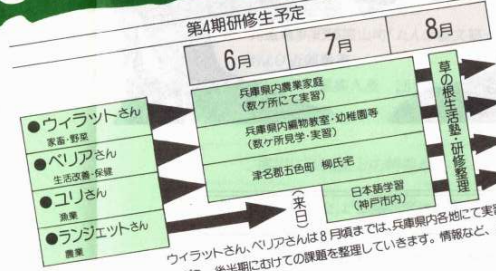
ベリヤ・ステータさん

研修生のふるさととはどんな国？

●可能性の高いボヤワラーナ

スリランカはビルドゥラガラ山(2518m)を最高峰とする山地が国土の1/6程度であとは平地の国です。コロンボ空港からゆくりと2時間、平地をドライブするとランジェットの村ボヤワラーナに着きます。彼の村は仏教の村です。私が訪れて二日目の夜が満月の祭で、村のお寺には真白な服を着た村人が大勢集まりお坊さんの説教を聞きまた瞑想にふけていました。宗教が生活の中に生きていくという素晴らしさを実感しました。ランジェット君のお父さんは水い間後政府の農場の農民であったということ退職後自分の庭にモデル農園を作り近所の人に焼き木や堆肥の作り方を教えている篤農家のようにです。

村長のチャールス・アビクーン氏は、自分の村の青年が、日本に研修に行くというとても喜んでます。今迄、村の貧しい農民に土地を与え、又農作業を手伝ってもらってきただけ貧富の差をなくしたいと努力してきた素朴な青年村長です。私が今迄訪ねたアジアの農村の中でボヤワラーナ村は、一番農村開発の可能性が高いような気がしています。というのは、村人の中に、様々な委員会が組織され活発に活動しているのです。ランジェット君を選んだ青年部は、今後村の開発の中心になると思います。(草地)



でしたが、11月には大きく拡幅された道路になっていました。国境警備隊が道を拡げ、かなり大きな車両(軍事用を含む)が通れるようです。そのため従来の貴重な水脈がズブズブに切断され、村の人はそれでもじっと何も言えずに沈黙していました。北タイの山間地には、このように平地のタイ族から抑圧を受けている少数民族の村が沢山あります。ウイラット君はチェンマイで成長し、学校も終了しました。お父さんの山間民族自立援助の動きを実現すべく寒村に入り、メニヤハディー村の女性と結婚し住定している。言わば下り青年です。それだけに村の人からの信頼もあり、村長以下みんなが本人の日本での学びに期待しています。彼の秘められた願いは、タイ族からの抑圧の困難の中で少数民族の文化的・経済的な自主を達成することだと思っています。ご支援を心からお願します。(草地)

3名の第4期研修生、タイのウイラットさん、ベリヤさん、インドネシアのユリさんは、各々3月末〜4月中旬にかけて来日し、5月下旬まで日本語研修でした。周囲日本語学習に励みながら、わずかに身ぶり手ぶりを交え、意志疎通が出来る程度になりました。過去の研修生がそうであったように、今後一緒に日本語という環境の中で、何となく身ぶり手ぶりを交え、多くの子供達と接する機会が生まれると思います。5月25日には、多くの子供達と一緒に神戸市内の海岸で空缶回収散歩を行いました。PHD運動の資金源の一部を自分達も体を使って担いました。彼らは、8月までは、研修準備期間として、日本での研修の可能性をいろいろ考え、来日以降の専門研修に備えます。スリランカのランジェットさんは、1月は九州から日本語研修に入る見込みです。自分から日本語研修に入る見込みです。九州、中国地方へと研修旅行に出かけます。皆々との出会いを通して、お互いに学び合うことができると思っています。積極的に出かけていきたいと思います。彼等の研修も試行錯誤です。研修に関するアドバイスもどうぞよろしくお願します。

研修を終えたショーバナさんへ

神戸服飾専門学校校長 石田篤子



人間は自分に適した職業に就いた時、最大限に自分の能力が発揮できます。ショーバナさんは研修の教育過程に於いて、全て基礎的な内容を重視し、すぐに実生活に役立つ知識・技能を習得し、専門技術を着実に研究してきました。ネパールの習慣やしきたりを重視しながらも、それにとらわれないで独自の創意工夫に力を入れ、特色を失わず着実に確かな技術や学力の育成に努めて下さい。全力が尽くされれば問題解決の糸口は開け、ボランティア活動の振興の望みも達げられます。日本に於ける研修技術による社会に対する解答は、実現されて初めて答えが出るわけです。必要なのは実力であり、実行であり自信です。研修によつて深めた知識や教養、そして技能教育を通して技術を研習し、人間として総合的な判断力を養うこともできました。そこから生まれる人間的豊かさ、磨かれた感性のすぐれた特色を益々発揮して、ネパールの文化の上に着実な発展を遂げるよう、振興に全力を尽くして下さい。そして国や社会の発展に貢献できるよう、努力して頂きたいことを望んでいます。ショーバナさんが、神戸服飾専門学校から立派に巣立ってくれた事を、諸先生方と心から喜び合ひ、在校生・卒業生・御父兄の方々と共に門出を祝福し、将来に大きく望みをかけております。

人間は自分に適した職業に就いた時、最大限に自分の能力が発揮できます。ショーバナさんは研修の教育過程に於いて、全て基礎的な内容を重視し、すぐに実生活に役立つ知識・技能を習得し、専門技術を着実に研究してきました。ネパールの習慣やしきたりを重視しながらも、それにとらわれないで独自の創意工夫に力を入れ、特色を失わず着実に確かな技術や学力の育成に努めて下さい。全力が尽くされれば問題解決の糸口は開け、ボランティア活動の振興の望みも達げられます。日本に於ける研修技術による社会に対する解答は、実現されて初めて答えが出るわけです。必要なのは実力であり、実行であり自信です。研修によつて深めた知識や教養、そして技能教育を通して技術を研習し、人間として総合的な判断力を養うこともできました。そこから生まれる人間的豊かさ、磨かれた感性のすぐれた特色を益々発揮して、ネパールの文化の上に着実な発展を遂げるよう、振興に全力を尽くして下さい。そして国や社会の発展に貢献できるよう、努力して頂きたいことを望んでいます。ショーバナさんが、神戸服飾専門学校から立派に巣立ってくれた事を、諸先生方と心から喜び合ひ、在校生・卒業生・御父兄の方々と共に門出を祝福し、将来に大きく望みをかけております。

第4期生紹介



氏名(性別・年齢) Mr. Ranjeth Jayantha (ランジェット ジャヤンタ・男・23才) 出身地 スリランカ 職業 農業 日本で希望研修内容 家畜、害虫防除

BOOKS 紹介



「ギタはインドの女の子」

- バーバラ & エバーハルト・フィッシャー / 文
●ディオナ・バティ / 絵
●久世礼子 / 訳
●『アジア・アフリカもたむち文庫』1,500円
お問い合わせは、アジア協会・アジア友の会へ
電話 (06) 341-0587

絵本には、ときおりはつとするほどの説得力を持っているものや、考えさせられるものがありますが、この作品もその一冊。淡々とした、それこそインドの女の子の日記のような語り口と生き生きとした生活感あふれる絵とが不思議な迫力をもって、インドの人々の生活、習慣、カースト制度など浮きぼりにします。子供はもちろん大人も楽しめる年齢を越えたインド入門書。

架け橋

貴方の目に見るPHDの光

PHD運動提唱者
PHD協会理事 岩村 昇

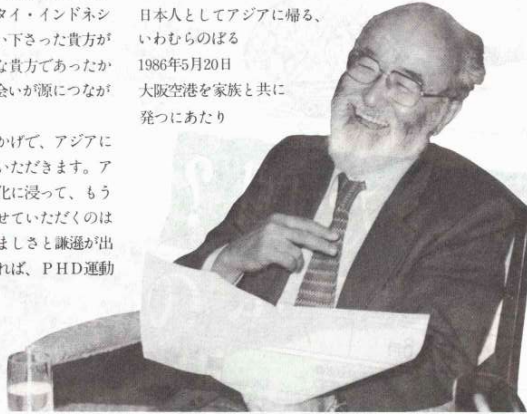
すでに新聞、テレビなどでご存知かと思いますが、岩村昇博士がこのほど神戸大学医学部を退職され、タイのプライマリーヘルスケア・プロジェクト・リーダーとして、バンコク郊外のサラヤというところに住むことになり、5月20日ご家族とともに出発しました。今後も引き続きPHD協会理事をつとめ、タイの草の根の現場からのPHD運動をすすめていきます。レターにも毎号、タイからのレポートを掲載予定です。

想えば、PHD運動「生きるとは、分かち合うこと、弱者と。」が始まってすでに5年。PHD運動に参加して下さり、「アジア・南太平洋の草の根の人達と分かち合う」PHD生活を5年間続けて下さる中で、肩書や老若男女の別を越えた貴方は、PHD文化を身に付けて

れました。私はその貴方の眼に、PHDの光を見るのです。この光は、ネパールの山奥で、結核で倒れたお婆さんを背負って、3日間、3つの山を越して歩いてくれた、そしてお金は取らず、「共に生きる為」という言葉をのこして去って行った、あのネパールのカースト制度の一番下積みの、つましい青年の眼にあった光なのです。そして貧しさとつましさが必ずしも同居しないという経験から、その光が消えてしまうことを知りました。そうなのです。光には源があるのです。貧しいのではない、つましい草の根文化を身に付けたネパール・フィリピン・タイ・インドネシアのPHD研修生にお出会い下さった貴方が10%を献げていられる謙遜な貴方であったから、つましさと謙遜の出会いが源につながって、光が輝くのです。今回、私は貴方の税金のおかげで、アジアに帰り、タイに住みつかせていただきます。アジアのつましい草の根文化に浸って、もう一度救われ、源につながらせていただくのは只々感謝であります。つましさと謙遜が出会えるような凶らいさえあれば、PHD運動はいつまでも、どこでも、誰にでも上げることが出来ます。自らをつつしみ、原点に帰れば、また、源から光を載せ、タイにもPHD運動が始まると信じさせて

いただけるのは、お恵みであります。今度、タイのPHD研修生が二人、貴方が10%お分ち下さったおかげで、日本に来ることが出来、日本語を学んでいる所です。一人は男性、もう一人は女性、どちらも爽やかな人柄です。最後に、ネパールのつましい草の根青年にならって、私は貴方にこの言葉をのこさせていただきます。本当に有り難うございます。サワディ・クラブ (タイの挨拶)

日本人としてアジアに帰る、
いむらほる
1986年5月20日
大阪空港を家族と共に
送つにあたり



国際交流について



執行孝胤

PHD協会監事 しほぶよう たかとも
1919年生まれ。大阪大学医学部卒。
執行耳鼻咽喉科病院院長。国際ロータリークラブ(スタガバナー)。

人と人との間では、出会いがあれば次に触れ合いがあり、そして語り合いとなって、人と人との交流が始まって行くものである。しかし触れ合いから語り合いへと発展しない様な出会いもある。私の今までの人生に於いて、出会いは何れの場合でも私の心の歴史の一つの過程であり、良い出会いはいつまでも私の心の糧としてある様に思う。外国を訪れる場合は、誰でも一つの目的を持っているのが普通であるが、外国へ行く事が自分の一生の中で大きな役割を果たすかも知れない様な場合は、その個人にとってしっかりと心構えがなければならぬ。見知らぬ土地に来て受けた一寸した心

の通い、また一寸した習慣の違いから感じる不愉快な事……。どこの国に行っても「郷に入っては郷に従え」という諺がある。しかしその「郷」を全ての人々が心得ているとはおもしろくない。そこで外国からの人々に対しては「思いやり」という心の豊かさが要求されるのである。我が国の繁栄は様々の因子があったのであろうが、その当時経済的に発展途上国であった日本から多くの若い人々が外国で学んだ事があった。その人々が訪れた国々の人には、夫々の感情があったかも知れないが、多くの人々は「心の豊かさ」を持って接してくれたのであった。しかし、今日の先進国といわれる

日本の豊かさは物質的な面が大多数であって、果たして「心の豊かさ」を兼ね備えているだろうか。「いたわり」や「愛情」はあまり見られず、自己中心となりつつある様に思われる。発展途上国であった頃の日本は、また祖国という観念が生きていたが、今の観念の次第に薄らいてきた日本の青少年と接した日研修生諸子は如何様に感じとる事であらう。彼等は日本で目的とする事を学んでいるが、我々も又彼等から学ぶ点も多いのではないだろうか。言葉の障壁はさておき、人間は心があれば交り合うものである。彼等研修生を通じて日本人は自らの足元を今一度見直す謙遜さを認識せねばならないと思う。

バイラテラルから マルチラテラル交流へ

PHD運動が唱えられて5年を経ました。草創期には、一時によく乾いたワラや木の葉がたくさん持ち寄せられ運動の炎は大きく燃えあがりました。その後、火力は少し沈静しましたが、現在太く固い薪に火が付き始めています。こうなれば少々の雨風にも耐え得るし火力は強くなります。その火力維持のため、薪を補充しなければなりません。そのため財団の基金を充実させその利子を充てたいと願って基本金充実の募金を昨年度から3ヶ年計画で

始めています。これが実現できればPHD運動の息の長い礎ができてと考えています。1986年度の第一の目標はこの基本金充実の募金事業の成功です。第二の目標は、アジアの青年達の日本における研修の考え方や場所を少し大きな観点から見直すことです。我々は、ともすれば日本とタイ、日本とインドネシアという形で国際交流を考へがちです。いわゆる二国間(バイラテラル)交流です。しかし、スリランカの農業青年が、日本の高度に進んだ農業のみでなく、もし、タイやフィリピンあるいは日本に近い韓国、台湾の農村を訪ねることができ、親しく交わらせていただければ、更に比較の中で学びの収穫が大きくなると思うのです。即ち多国間(マルチラテラル)交流です。この

ような試みを昨年度実験してみました。今年度は、もう少しそれを拡大し、研修方法を研究していくことにしています。第三の目標は、職員の専門性の拡充です。アジアの草の根の人々のために！という情熱を真に表現するためには、国際協力の在り方、手法、情報分析、組織運営などの点で高い専門性が、だんだん要求されてきています。他団体との交流も含めてlearning by doingを進めます。これらが実現するためには、何といたっても会員の皆様のご理解とご支援が必要です。より多くの会員が与えられ6年目へ向けて安定し、充実した運動に育てていただきたいと念願しています。

PHD協会監事 草地賢一

PHD NEWS

第2回草の根生活塾ご案内
マチの生活からは見えない視点から農と土と食を考える「草の根生活塾」体験から得た下さい。詳しくは協会にお問合せ下さい。
期間 8/17日～8/22日 5日6日
場所 兵庫県多紀郡篠山町「たんば農文塾」
および近郊農家
費用 約2万円 募集人員 25名
申込締切 7月31日

基金寄託状況(会員・ご寄附)			
1986年	2月	¥ 2,643,922	125件
	3月	¥ 11,967,562	246件
	4月	¥ 5,801,978	467件
		計¥ 20,413,462	838件

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。慎しんでお申し上げます。

開発の勉強のため4月より休職し、新たに髪を短くした女性職員として着任しました。



編集後記

理事会報告
3月4日 第12回理事会において①長島晴雄氏の理事退任と真鍋正志氏の理事就任 ②85年度補正予算案 ③86年度事業計画および予算案 ④規程の一部改正について審議が行われ、また5月14日 第13回理事会では、①85年度決算 ②四海好吉氏、田淵栄次氏の理事退任ならびに今井鎮雄氏、鯉坂二夫氏、清水良次氏、石井 博氏、岩村 昇氏、多胡橋祐氏、真鍋正志氏の理事就任、執行孝胤氏、山田 祐一郎氏の監事就任の審議が行われました。

職員交代のお知らせ
大浜裕主事がフィリピン大学修士課程で地域

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため掲載しておりません。

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため掲載しておりません。